路上のこどものこえ

Voices of Children on/of the Street

あいちモリコロ基金助成

認定 NPO 法人アイキャン
International Children's Action Network (ICAN)

はじめに

この冊子は、フィリピンの路上の子どもたちの「こえ」として、認定NPO法人アイキャンが運営する児童養護施設「子どもの家」で暮らす子どもたちのケーススストーリーをまとめたものです。

「子どもの家」は、マニラ首都圏に隣接するサンマテオにあります。ここで暮らす子どもたちはいずれも、入所する前は、家族の死亡や離散、育児放棄などにより、日々食べていくこともままならず、きょうだいとともに、または一人で、路上で働き、生きてきた、元「路上の子どもたち」です。自分の誕生日や年齢、家族の名前を覚えていない子、一度も学校に通ったことがなかった子など、様々な子どもたちがいます。それぞれ辛い過去を抱えていますが、アイキャンと出会ったばかりの頃は、そうしたことも話せないほど、心を閉ざしていた子どももいました。私たちと徐々に信頼関係を築き、話してくれた過去の経験や思いを、次ページ以降にまとめています。

この冊子を通じて、路上の子どもたちの「こえ」が社会に届き、同じような辛い経験をする子どもたちが少しでも減っていくよう、そしてこの問題に対して、「できること」を考え、実践する人が増えていくことを願っています。

なお、本書は、「愛・地球博開催地域社会貢献活動基金（あいちモリコロ基金)」の助成金を受けて作成致しました。心より感謝申し上げます。

2017年3月

認定NPO法人アイキャン
事務局長　井川　定一

路上の子どもたちについて

最近では、近代的な高層ビルやリゾートのイメージもあるフィリピンですが、その一方で、25 万人以上の路上の子どもが存在すると言われています。その数は誰も正確に把握できておらず、特に出生登録自体されていない子どもや、家族と完全に断絶している子どもたちは、統計に表れることすらありません。

子どもが路上に押し出される背景は様々です。経済的貧困、家族の離散、家庭内暴力、育児放棄などがあり、路上の子どもの約 90%が家庭内暴力を受けたことがあるとも言われています。子どもたちは生きるために路上へと飛び出し、政府の社会保障が十分に機能していない中、路上にいる他の子どもとグループを作ること、またはギャングの一員となることで、生き延びています。

路上では、様々な危険が子どもたちを襲います。寝ている間に襲われ、暴行を受ける、強制的に連行され、数日後遺体で発見される、ギャングの抗争に巻き込まれるなど、路上の子どもたちは常に暴力と隣り合わせの状況に置かれています。更に、頻繁に起きる交通事故や病気、周囲からの偏見、過去の虐待に起因するトラウマと人間不信、日々の空腹が、子どもたちを一層苦しめます。辛さや空腹感を忘れるためにシンナーなどの薬物に手を染めてしまう子どもも多く、路上の子どもの 54%が薬物を経験していると言われています。

路上の子どもたちが、子どもらしく幸せに生きていくために

路上の子どもたちが、子どもらしく幸せに生きていくためにアイキャンが採用している３つのアプローチをご紹介します。

1. 地域行政強化アプローチ

路上の子どもを生み出さない地域を作るためには、自治体の「子どもを守る委員会（BCPC[1]）」が各家庭の状況を把握し、相談対応を行い、介入が必要な子どもと行政サービスを繋げることが鍵になります。そこで、アイキャンでは、この**BCPC を強化するための自治体研修**を実施しています。

2. 路上の子ども・若者の力によるアプローチ

同じ境遇にある路上の子どもや若者の力をまとめ、自分たちの人生や社会を自分たちで変えるための様々な活動を行っています。その一つが、**路上教育**です。路上の子どもたちが集まり、自分たちの置かれている現状や将来についてともに語り合うことで、シンナーを止めたり、施設で生活することを決めたり等の行動変化を促しています。路上で働く若者には、様々な**職業訓練**も行っています。その１つに**「カリエ」[2]というグループの活動**があり、彼らは、パン作りの技術訓練等を経て、現在、マニラのフィリピン大学でカフェを運営しています。

---

1 Barangay Council for the Protection of Children：「バランガイ子どもを守る委員会」

2 カリエ：フィリピンの言葉で「路上」という意味。フィリピン初の路上の子どもの協同組合。

3. 福祉的アプローチ

路上の子どもの中でも親の不在や親の養育の意思や能力がないケース等に対して、「命を守る」最後の活動が、このアプローチとなります。

■ドロップインセンター（通所型の一時保護施設）の運営

路上の子どもが多い地域の中に設置され、毎日夕方まで開所しているのが、**ドロップインセンター**です。5 歳から 14 歳の路上の子どもたちが、**日々シャワーを浴び**て身体を清潔にし、**栄養価の高い食事**を得て、**読み書きや計算を学んでいます。**更に、**ソーシャルワーカーによるカウンセリング**を通して心の傷を癒すとともに、**安心して眠ることができる仮眠場所**も提供しており、日常的に命の危険に晒されている子どもたちが、唯一身の安全を感じられる場所として機能しています。希望する子どもには、アイキャンやパートナーNGO 団体の**児童養護施設の紹介**を行っています。

■児童養護施設「子どもの家」の運営

身寄りのない子どもたちが、学校を卒業できるまで、他の子どもたちとともに暮らすアイキャンの児童養護施設です。子どもたちは、**栄養価のある食事**や**安全に眠る場所**を得るだけでなく、**通学経費の全額補助**を受けて学校に通い、スタッフに愛情を注がれながら健やかに成長できる場として運営されています。「子どもの家」の子どもたちは、様々な研修も受け、**現在も路上にいる子どもたちや、日本の子ども・若者に対して、自身の経験を共有する活動**も行っています。

路上の子どもたちのこえ

ダニエルくん（10 歳）のケース

路上での日々

僕には、お父さん、お母さん、お兄ちゃん二人、そして弟がいて、幼い頃は、一緒にパヤタスという地区で暮らしていました。そこには大きなゴミ山があり、そこには資源ごみを回収して働いている人がたくさんいました。僕が 2 歳の時、お母さんは、そのゴミ山で拾った食べ物を食べて、食中毒で死んでしまいました。その後、二番目のお兄ちゃんも、病気で亡くなりました。今でも、そのことを思い出す度に、本当に悲しくなるし、泣いてしまいます。

お父さんは僕たち三人を連れて、コモンウェルス市場に移り、お菓子や煙草を売る仕事を始めました。僕が 6 歳の時です。お父さんは、1 日中働いていて、育児ができなかったので、幼い弟は、叔母さんの家に預けられました。僕はそれ以来弟には会っていません。

コモンウェルス市場にはたくさんの人がいて、野菜、米、フルーツ、魚、肉などを売るために、露店の人はいつも自分の店の商品を叫び、お客さんの注目を集めようとしていました。みんなゴミをその辺に捨てるので、市場の周りは本当に汚かったです。市場の中には路上で暮らす大人や子どもがたくさんいて、買い物している人に物乞いをしていました。お父さんは、僕が毎日ご飯を食べられるように、一生懸命働いてくれていました。お兄ちゃんも、僕たち家族が食べていくために、必死で市場の掃除や路上で物乞いをしてくれていましたが、ある日、道路を横断している時に、車にひかれて死んでしまいました。

お父さんが病気になって、僕に薬をもらってくるように頼んできたことがありました。しかし、なぜかその時僕は従いませんでした。その後、お父さんも死んでしまい、僕はひとりぼっちになりました。僕はそのことをいつも思い出

します。僕がお父さんに従わず、薬をもらってこなかったから、お父さんの病状は悪化したのだと思い、本当に後悔しています。お父さんのことを思い出す度に、本当に悲しくなるし、泣いてしまいます。

お父さんが死んだ後も、僕は一人で市場に住んでいました。物乞いをしたり、野菜の皮をむいたり、ゴミ拾いをしてお金に替わる物を探したりしていました。僕が物乞いをしていると、「どうせ悪いことや、どうでもいいことにお金を使うから、あげても無駄だ」って言ってくる大人もいました。そういう時は無視して、別の場所で物乞いを続けました。露店を手伝っている時は、いつもより多くご飯を食べられるので、それだけは幸せだと思いました。でもそれだけ。他には何も感じていませんでした。寝る場所は、ビリヤード台の上や、市場のトライシクル（三輪バイクタクシー）ターミナルにある空いたスペースでした。トライシクルの隣で寝ている時に、ドライバーが僕に気づかなくて、右足をトライシクルに踏まれたこともありました。寝る前は、今日も僕が生き残れたこと、そして生きる糧を与えてくれた神様に感謝していました。

短期保護施設への入所

9 歳の時、その市場で NGO のソーシャルワーカーに出会い、その団体の短期保護施設に入所することになりました。それからの 2 年間、その施設でいろいろなことを学びました。小学校に入るための準備として、近くの学校の幼児教育用の授業を受け、アルファベットと数字を学びました。僕は、それまで一度も学校に通ったことがなく、文字が分からないので、自分の名前を書くこともできませんでした。その NGO の教育係の人や学校の先生は、学校に行って勉強をすることは、良い大人になる近道だって教えてくれました。良い大人になれ

ば、よい未来もある。あと、学校に行けば友達もたくさんできるから寂しくないよって言ってくれたから、行こうと思いました。実際に、学校ではたくさんの事を学び、たくさんの友達ができて幸せでした。

アイキャン「子どもの家」への入所

短期保護施設は、2 年間を上限に出ていく必要があったため、僕は、より長く滞在できるアイキャンの児童養護施設「子どもの家」に移りました。ここでは、スタッフや寮母さんがいつも助けてくれるし、良い大人になれるように教えてくれます。寮母さんのことは大好きで、本当の親みたいに感じています。優しいし、マナーも教えてくれるし、必要な時に助けてくれます。

「子どもの家」に来る前は、一人でいることが多く、誰にも邪魔をされないから幸せと感じる一方、言葉では表せない寂しさに襲われることもありました。でも、寮母さんが、いつも一人でいる僕を心配して、「話しかけるのは勇気がいることかもしれないけど、ここにいる子はみんなお互いを友達と思って、頼って生きている。友達になれば、困った時に助けてくれるし、自分自身が幸せになれるよ。」と言ってくれました。僕は少しずつ他の子と遊ぶようになり、最近は、家事や学校の宿題を助けてほしいと頼めるようになりました。

学校では、(実年齢より下の学年のため) 僕は他の同級生より体が大きいし、歳も違うけど、別に気にしていません。違いはあるかもしれないけれど、そのことが、自分が学んで夢を追いかけることへの邪魔にはならないと思うからです。今僕は、ここで一生懸命生きていると思うし、いつか路上に住んでいる子どもを助けたいと思っています。一生懸命勉強して、学校を卒業し、将来は、機械を発明する人になりたいです。結婚して、子どもを持つとしたら、幸せで平和な家族をつくりたいです。奥さんと子どもを愛して、一生懸命働いて家族を養い、立派な一家の大黒柱になります。

カルロくん（11 歳）のケース

路上での日々

僕は 10 人きょうだいの 7 番目です。お父さんは、僕がまだ生まれたばかりの頃、殺人の罪に問われて逮捕され、刑務所に入ってしまいました。お母さんは、お父さんに会うためによく刑務所に行っていて、僕たちを全然かまってくれなかったので、その間はお兄ちゃんたちが僕たち弟妹の面倒を見てくれました。お母さんはその後、他の男の人の子どもを産み、ある日、僕たちに一言もなく去ってしまいました。お姉ちゃんは泣いていたし、僕もすごく寂しかった。でも、きょうだいと一緒だったからまだ幸せだったと思います。お父さんは、刑務所内で病気になり、僕が 6 歳の時に死んでしまいました。お父さんもお母さんもいなくなり、僕たちはきょうだいだけで生きていくことになりました。

お兄ちゃんたちは、トライシクルの運転手をしていましたが、僕も、ブルメントリットという所の市場で働きました。タマネギの皮をはがしたり、掃除したり、時には市場を歩いている人に物乞いをしたりして、1 日大体 40～50 ペソ（約 100 円～125 円）をもらっていました。お金を多く稼げた時は、他の兄妹にも分けるために、多めに食べ物を買いました。小さい体で働くことはとても大変だったし、臭いし、疲れるけれど、きょうだいと一緒にいられるから幸せだったし、一緒に遊んでいる時はとても楽しかったです。

日中は僕もきょうだいも、全員が食べるためにお金を稼がないといけなかったから、一生懸命働きました。夜になると、ブルメントリットの駅のターミナルの階段や歩道、コンクリートの上など、濡れていない所を探して寝ました。明日は食べられるのかなと、不安な夜を毎日過ごしていました。

ある日、僕は、友達に誘われて不良グループのメンバーになりました。悪いことへの好奇心と、グループに属することで落ち着くことができる居場所がほ

しかったからです。あまり積極的には関わらないようにと思ってはいましたが、それでもやはり影響を受けて、タバコやシンナーを吸ったり、お酒を飲んだりしていました。特に薬物に関しては、僕も悪いことなんじゃないかって分かっていたし、他のきょうだいも、薬物を使っている僕を見て、とても怖がっていたと思います。でも、きょうだいたちは、僕が薬物をやるのは、不安とか怒りとかそういう気持ちから逃げるためだって知っていました。僕は、その後もずっと薬物を使い続けました。

しばらくして、僕はきょうだいと一緒に、マニラのエスパーニャ通り沿いに移りました。ある時、その地域の役場の大人に「浮浪者だから」という理由で補導され、政府の「保護施設」に連れて行かれました。2 日後には解放されましたが、その施設はひどい所で、ご飯は食べられるような味ではなく、職員が他の子どもに暴力を振るっている姿も目撃しました。

解放された後、僕はエスパーニャ通りに行ったら、また補導されるかもしれないと思い、ブルメントリットの不良グループのところに戻りました。ブルメントリットには、たくさんの路上の子どもと家族がいて、ほとんどの人は露店で働いていました。ゴミがたくさん落ちているけど、誰も気にしないし、どこに捨てればいいか分からないから、どんどんゴミが増えていきました。たまに、街の人が喧嘩をしていて、汚い言葉をたくさん聞きました。

路上では、危険な目にも遭いました。例えば、市場で遊んでいるときにバイクに轢かれて、頭を強打したこともありますし、他の子どものグループと集団で喧嘩になり、体全体に怪我をしたこともあります。路上でそんな生活をしながらも、いつかお金をたくさん稼いで、毎日、生きていくことに困らないようにしたいって思っていました。あと、いつか家族全員が一緒に暮らして、幸せな生活ができるように、大きな家を建てたいと思っていました。

ICAN との出会い

ブルメントリットの路上で暮らしていたある日、僕は ICAN のスタッフに声をかけられました。そして仲良くなり、ICAN のドロップインセンターに行くようになりました。ドロップインセンターでタガログ語や算数を勉強し、積極的に活動に参加していると、僕はリーダーを任されるようになりました。それから、自分が他の子どもたちのモデルになることを意識し、他の子が積極的によい行いをするように働きかけていくようになりました。ドロップインセンターに通ううちに、学校に行けば、路上生活から抜け出すことができ、人生を変えることができると確信し、僕は、ICAN のスタッフに、「施設に入りたい」とお願いしました。勉強してソーシャルワーカーになって、他の子どもたちを助けたいと思ったからです。

そこで、僕はある NGO の短期保護施設を紹介してもらい、1 年くらいそこで暮らしながら、学校に通わせてもらいました。その施設は長く住むことができないので、その頃新しくできた ICAN の児童養護施設「子どもの家」に移りました。「子どもの家」では、床掃除や食器洗いを積極的に手伝うようにしています。ICAN のスタッフや寮母さんが、僕が良い行いをすると、「ありがとう」と言って感謝してくれます。良い人間になるために、日々努力していきます。

ここに来てから、このまま頑張れば学校を卒業でき、自分が将来やりたいことをできると心から思えるようになりました。とても幸せです。路上に戻りたいと思ったことはありません。勉強を続けて、ソーシャルワーカーになるという夢を叶えるために、「子どもの家」にいたいです。そして、ソーシャルワーカーになったら、路上の子どもたちのために働き、彼らを路上から助け出したいです。

マーティンくん（12 歳）のケース

路上での日々

僕は、本当のお父さんのことを知りません。きょうだいに聞いても、誰も分かりませんでした。僕は、お母さんがどんな人だったのかも思い出すことができません。3 人のお兄ちゃんたちと一緒に、幼い頃お母さんに捨てられてしまったからです。お母さんは、何も言わずに出て行ってしまいました。理由も全く分からないし、その時の気持ちは、何て言えばいいかよく分かりません。ただ、これから誰が僕にご飯をくれるんだろうと思っていました。ある日、友達から、僕のお母さんは近くの地区のお店で働いていると聞いて、会いに行ったことがあります。僕たちが住んでいる道路まで来てくれたことも 3 回くらいあり、食べ物やお金をくれました。でも、それ以降はなぜか来なくなってしまいました。理由は全くわかりません。

僕は、生きるために、川でお金を探したり、物乞いやゴミ拾いをしながら過ごしていました。缶詰を盗み、売ったこともあります。路上でお金を稼ぐのは本当に大変で、今日はご飯が食べられるかな、明日は何ペソ稼げばいいのかなっていつも考えていました。物乞いをしている時、たまに「なんでそんなことしているんだ？両親はいないのか？」って聞かれたけど、聞かれてもずっと黙って、そこから離れてまた物乞いを始めました。盗みは悪いことだって分かっていたけど、仕方がありませんでした。そうしないと生きることができないからです。毎日の食費をどうやって稼ごうか、ただそれだけで、他のことは何にも考えていませんでした。

僕が住んでいたマラボンという地区では、たくさんの人たちが、厳しい生活を送っていました。そこには、儲かる仕事なんてなくて、みんな露店での稼ぎに頼るしかありませんでした。そして、みんなゴミの捨て方を知らないから、

ゴミがたくさん落ちていました。いつもどこかで、大人か少年グループが喧嘩をしていたから、いつもうるさく、混沌としていました。路上に住み始めた時、僕が何歳だったかは覚えていません。路上で生活している多くの友達もできたけど、敵もたくさんいたし、悪い友達もいました。その友達の影響で、タバコを吸ったり、お酒を飲んだり、マリファナを使ったりしました。そんな頃、市の役人に補導され、政府の保護施設に連れて行かれました。そこで一週間過ごした後、民間の保護施設を転々としていました。

ICAN との出会い

最後の民間の保護施設も、資金難で 2016 年に閉鎖されることになり、それを知った ICAN のソーシャルワーカーが、「子どもの家」に入ることを提案してくれました。

「子どもの家」に入所してからは、規則正しい生活をして、体調もいいし、いつも正しい道に進んでいると思うことができます。悪いことはもうしないし、他人を敬うマナーを学べたと思います。寮母さんもとてもいい人で、大好きです。食事を作ってくれるし、いつも助けてくれます。寮母さんが作るご飯は全部好きです。中でもティノラ（鶏肉のスープ）が大好きです。

普段、学校が朝 7 時に始まるので、6 時 30 分にトライシクル（三輪バイク）で「子どもの家」を出ます。午後 3 時まで授業を受けて、またトライシクルで帰ります。学校は、人数が多すぎて入りきらないので、二部制になっていて、僕は朝が早いけど、「子どもの家」には、もう少し遅く登校する子もいます。学校から帰ったら、寮母さんに、「今日は学校でテストがあった」とか、「バス

ケをして遊んだ」ということを話しています。テストの点数が悪ければ、「次はよく勉強して良い点数を取りなさい」と寮母さんに言われます。僕は歴史が好きで、歴史の成績は他の子より良いです。学校の同級生と比べて、自分が何か違うと感じることはないです。同じ人間だから。時々、僕にお母さんやお父さんがいないことをからかってくる子がいるけど、別に気にしていません。

毎週金曜日は、「子どもの家」で一緒に暮らす仲間と、ボーイスカウトに参加しています。おそろいのシャツを着て、マーチングの練習や学校の清掃をしています。ボーイスカウトは、将来に役に立つ活動だと思っています。

アイキャンの活動である、路上教育やスカイプ交流[3]にも、楽しく参加しています。特にスカイプ交流は、画面上で日本の人が動いていて、いつもとは違う話もできるので、とてもワクワクします。日本の人がタガログ語で挨拶をしたり、僕たちも覚えた日本語で挨拶をしたりして、会話も楽しく、日本のことを知れるのが嬉しいです。

これからは、「子どもの家」のお手伝いをもっとしたいと思います。今も路上に住んでいる子たちを助け、「子どもの家」の敷地内のたくさんの植物の面倒も見たいと思っています。路上での生活は本当にひどかったので、そこに戻りたいと思ったことはありません。勉強してもっと知識を増やし、進学したいです。将来結婚したら、幸せで愛情ある家族を持ちたいと思います。一生懸命働いて、自分の子どもを学校に通わせ、幸せな人生を送りたいです。

---

3 日本の若者とスカイプ（インターネット電話）を繋ぎ交流する相互理解を深める活動。「愛・地球博開催地域社会貢献活動基金（あいちモリコロ基金）」の 2015 年度、2016 年度の助成事業として実施され、計 400 名以上の若者が参加した。

アイキャン（ICAN）の概要

アイキャンは、フィリピンを訪れた会社員が子どもたちの置かれた現状を前に、「何かできることがあるはず」と思い、友人と集めた 5 万円で 1994 年に設立されました。アイキャンという名称には、「一人ひとりのできること」を持ち寄って活動を進めるという意味が込められています。

一人ひとりのできること（ICAN）　～ぜひ、一緒に活動してください！～

１）書き損じハガキ収集活動

年賀状の書き間違え等の未投函の官製ハガキを集めてアイキャンに送っていただくことで、子どもたちの活動に役立てることができます。毎年たくさんの学校に、ご協力いただいています。

■募集しているもの：

未投函の官製ハガキ、未使用の切手、未使用のテレフォンカード、商品券、収入印紙

２）古本・CD・DVD 収集活動

ブックオフオンライン株式会社との連携により、下記のものを換金し、活動に役立てさせていただきます。一定量以上は送料が無料になります。

■対象物一例：単行本・文庫・新書・単行本・CD・DVD・ゲームソフト等

３）街頭募金活動

学校での生徒会やボランティア部等による街頭募金を通じて、路上の子どもたちの状況を改善することができます。また、毎月 1 回、土曜日の午後に、10 年以上名古屋市（栄）の街頭で、アイキャンの募金活動を行っています。こちらでは、毎回、10～30 名の学生を中心としたボランティアが、路上の子どもの保護施設「子どもの家」の運営費などを呼びかけています。

詳細は、ホームページをご覧いただくか、日本事務局までお問い合わせください。ぜひ、ともに路上の子どもたちの状況を変えていきましょう。

アイキャンの理念

「アイキャンな人（できることを実践する人)」を増やすことで、
世界中の子どもたちが享受できる平和な社会をつくります。

大切にしている言葉

人々の「ために」ではなく、人々と「ともに」
Not “for” the People, but “with” the People

プライバシー保護のため、本文で登場する子どもたちの名前は仮名で、
写真も本人のものではございません。ご了承ください。

認定 NPO 法人アイキャン
International Children's Action Network (ICAN)
〒460-0011　愛知県名古屋市中区大須 3 丁目 5 番 4 号矢場町パークビル 9 階
TEL/FAX 052-253-7299（火～土曜　12 時～19 時）
E-mail　info@ican.or.jp　（代表）
ホームページ　http://www.ican.or.jp/
Facebook　https://www.facebook.com/ICAN.NGO

イロドリ
印刷通販
印刷 イロドリ SEARCH